

ふじわらのさねかたあそん 藤原実方朝臣と五百川物語

本宮町

それは、長徳一年（九九五）のことです。左近衛中将まで昇った歌人の藤原実方朝臣は、殿上で大納言藤原行成と口論の末、笏で行成の冠を打ち落としてしまい、そのことが一条天皇の勘気にふれ、天皇より「陸奥国の歌枕をみてまいれ。」と命じられ、陸奥守に任ぜられ、三諸・坂上邦別・橘熊雄・大伴豊獨・小野荒金・田口八潮・金幸軍・笠数鹿の八人の従者を従え陸奥国に旅立ちました。

実方は、遠く京の都から陸奥国へ下向の道々大小の川を渡り、そのことを帳面に記しながら五百番目の川の里、当地にたどり着いたのでした。これが五百川の名称の起りです。

当地では五百川の上流の横川（郡山市）に館を構え、そして松幌山（現本宮町大字小屋館山）に別邸を造り住み、都からのよい報せを待つておりました。春三月、松幌山の別邸で都から従ってきた家臣どもと共に杯を交わしながら、ここからの眺望と自身の心を次のように詠んでいます。

蕩々流水 豊々苗田 牛馬絡繹 人家綿連 俯臨下土
仰望上天 天徳恢々 吾懐悠々 浮雲未尽 長蔽帝州

この歌から岩根の古い地名（現本宮町大字岩根の一部）の苗代田が生まれたと伝えられています。

ある日、実方が五百川の上流を探索に出掛けたとき、豪雨に遭い体をこわし別邸に担ぎ込まれましたが、それがもとでこの地で亡くなつてしまいました。それは、長徳四年（九九八）十二月十二日のことでした。